

はじめに

今回、取り上げたのは羅永浩に関する彼の人生と彼の会社についてことである

扱う、昔は英語教師としての「羅永浩」とIT関連業界に進出することである。なぜなら、昔の羅永浩の仕事と今の仕事は全く違うの素晴らしい経歴は日本に伝えたいからである。本文は羅永浩との会社

「Smartisan」に基いて私が好きな原因を説明して行く。

本論

羅永浩の人生は素晴らしかった

羅永浩、男性、中国吉林省延边朝鮮族自治州和龍県を生まれ、中国の教育制度に我慢しないので高校2年の時を辞めてから2001年まで、この数十年間で彼は自学で行なっています。彼は一番偉いところのは、英語講師になるため彼は2年間で一生懸命に自学して英語能力は0から1まで最後は突破的なGRE英語講師になりました。ちなみに、この数十年間の間に彼は学習しながら様々なバイトもやっています、あんまり良くないバイトなので、ここではっきり説明ができないのでご理解いただけますようお願い申し上げます。

2001年から2006年までに英語塾「新東方」のGRE英語講師に就任した。2006年7月31日、同社のブログウェブサイト「bullog」を設立された。他の一般的なブログプロバイダとは異なり、Bullog.cnは無料で登録してスペースを提供しますが、ブログを開くためのアプリケーションは主に自己推薦によって管理者に送信され、レビュー後に開くことができます。その後、多数の中国の自由主義者が歓迎された。

2012年5月15日に中国スマートフォン新興メーカー会社「Smartisan」を設立された。

前文から見ると、彼は40歳前の生活や仕事などあんまり安定ではないだと思う。

なぜ、羅氏はそんなに若まなのか？安定的な仕事を働いていいんじゃないでしょうか？

羅永浩は「もしあなたが一生真剣にならば、ちょうど正しいことができなくて、どんな吐き気がしたことをしていないで、他人に対して傷つけることをしていないで、命をかけて妻、子供、母さんを一生懸命にして、身の回りのこれらの人の世話をよくして、有名になっていないで、財産がなくて、偉大な事業を達成していないで、一生正直で、七十五歳になって死んでしまったら、あなたの人生は社会を変えていないのではないのでしょうか？そう、あなたは社会を変えた、あなたが生きていてこの社会が少しずつ美しくなりました。」(1)と言った。羅永浩はこの社会がもう少し美しい美しくなるため、周りの人の偏見を気にせず、若まましてやりたいのことをやって見たいだと思う。

筆者：羅永浩『我が闘争』 21ページ

中国新興スマートフォンメーカー「Smartisan」について

「Smartisan」の意味は、「Smart」と「Artisan」の組み合わせで、「スマートフォンの時代の職人」の意味である。(2) 昔は英語講師の羅永浩なぜ、羅永浩はスマホ業界に進出しなければならないのか？

itmediaの報道のとうり羅永浩は「私自身は長らく英語教師も務め、その後は教育関連企業を経営していました。しかし40歳に近づいたとき、教育業界にこのまま身を置くよりも、自分の好きなことをやってみたくて考えたのです。その際、出資者が「長く続く企業をやるべきだ」とアドバイスしてくれました。私は小さいころから大工にあこがれていましたし、またPC時代からAppleの製品を使っていました。そこで思い浮かんだのがスウェーデンのIKEA、米国のAppleです。この2つの企業の業界が自分の進む道だろうと考えたのですが、当時の私の知識や能力から考え、IT系の会社を起業しようと結論を出したのです。個人的にもソフトウェアのUX（User Experience）やHCI（Human Computer Interaction）に興味があり、その研究を7〜8年続けていました。またインダストリアルデザインも同じくらい勉強をしていたのです。この知識を基にIT製品を作れば、使いやすだけでなく美しいデバイスが作れるだろうという自信もありました。それに加え、教育系の会社をやっていた時にマーケティングやPRのノウハウも身につけていました。そこでスマートフォン市場へ参入することを決めたのです。」と言った。そう言えば、羅永浩はゼロからスマートフォン業界へ参入するのは簡単ではありません。itmediaの報道第二段落目のとうり「スマートフォンメーカーを創業すると決める半年前から、さまざまな出資相手に話をしましたが、誰からも「それはやめたほうがいい」というアドバイスを受けました。また投資家たちからも同じ警告を受けました。なぜならスマートフォンメーカーの運営は複雑で、サプライチェーンが長すぎることで、さらに私自身にIT関連の人脈などが全くなかったことからです。技術系、IT系